

## 2章『戦うアイドル』4

高岡市主催のアイドルオーディション最終選考の審査結果の 때가 やってきた。

舞台の上には、総勢96組97人の少女たちが4列に並び、自分の番号と名前を呼ばれるのを今か今かと待ち構えていた。その中にカノンとセシルの姿もあった。2人は最後列の一番端っこで手と手を取り合い、その瞬間が訪れるのを待っていた。

「大丈夫」。セシルがカノンの手を強く握りしめて言った。

「だよね。絶対、私たちが合格よ」。カノンが自分に言い聞かせるように強く言い切った。

客席には、最終選考者の家

# あみたん娘

## The NOVEL

酒井 直行

22



キャラクター原案 松原秀典  
イラスト 那智泉

族たちが大勢見守っている。通路には、NHKと民放各社のテレビカメラがずらりと居並び、緊張している少女たちの様子を撮影している。富山新聞をはじめとした新聞各社もカメラマンたちが一眼レフを構えてい

た。

「思ってたより大掛かりなイベントみたいだね。結構結構。高岡市も頑張ってるじゃん」

いつの間にかやってきていたのか、あみたんがフワフワとカノンとセシルの真上辺りに浮かんでいた。

「あみたん、ヤバイって！ みんなに気づかれちゃう！」

パンチ頭に驚いたカノンが小声であみたんに呼びかけた。

「大丈夫だよ。僕の姿は君たち以外には見えないからね」

「そうなの？」。セシルが素っ頓狂な声を上げ、周囲を見回した。なるほど、誰も、舞台隅の空中に浮かぶあみたんの姿に驚いたり、カメラを向けたりしている様子がない。

「それでは発表します。高岡市ご当地アイドル合格者は……」。高岡市長が、合格者名

が書かれたカードの入った封筒を開ける。

カノンとセシルのつないだ手がギューッと強く握られた。

「エントリーナンバー96、あみたん娘？ カノンさんセシルさんです！」

「やったあ！」。真っ先に歓声を上げたのはあみたんだった。もっともその声はカノンとセシルだけにしか聞こえなかったのだが。

「やったね」。カノンとセシルが顔を見合わせ、ウインクをし合った。

大きな拍手とフラッシュの嵐の中、突如、客席で一人の人物が立ち上がった。

「異議あり！」。夏なのに革ジャンを着てサングラスをかけた中年男が大声で叫んだ。市内CDショップの店長、稲垣

広大だった。